

幼い頃から歌ってきた「たきび」の風景が、
今もそのまま残っていると新聞記事（東京新
聞・2017・2・15付）で読み、先日行って
みた。

記事を目にしてから約十ヵ月経つので、もし
かしたら無くなっているかも…と不安を抱きな
がらだったが、「あった！」。

かきねの 垣根の まがりかど

たきびだ 焚火だ 落葉たき

あたらうか あたらうよ

北風びいふう 吹いている

（巽 聖歌 詞

渡辺 茂 曲）

西武新宿線・新井薬師前から徒歩五〜六分、
静かな住宅街の中に、竹製の垣根が樫の巨木を
間にはさみ込みながら、長くずーっと続き、角
を曲がってまだ続き、またまた曲がって続いて
いる。そのお宅はこれまたなんとも広い敷地で、
その三辺をこの竹の垣根が囲っているというわ
けだ。

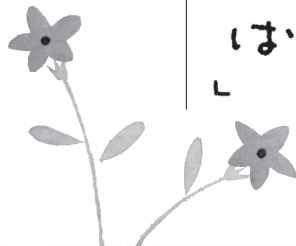
連載エッセイ

Vol.212

耳をすませば

垣根のまがりかど

今井登茂子



タイトル・タカハシカズエ

その上に、まるでジャングルみたいにからみ
合った雑木林も庭の一角にあつて、小鳥がピー
ピーと忙しそうに出たり入ったりしていた。

正直云って垣根ともども、この林が残されて
いることにも驚かされた。

特に今の東京は、目指せオリンピックイヤー
とばかりに、昨日あった建物も今日は無い、の
連続。「あった」と安堵した気持ち、お分かり
いただけるかと思う。



その垣根の途中の、中野区教育委員会が平成二十六年に建てた看板に、こう記されていた。

「詩が作られた昭和五〇六年頃から十三年間、この「たきび」の作詞者・巽聖歌が上高田四丁目之家を借りて住んでいた」、だから散歩に丁度よいコースだったのだらうと。

この垣根が間違いない、歌の垣根だ、ということとは研究され証明されている。

では、この竹製垣根が、なんらかの公的保護のもとで維持されてきたのかと云えば、全くそうではないのだ。

このお宅の家主の男性（64）が、今も自費で守り続けている。公的な対象にはならないらしい。

私が見に行った日は、寒く、晴れた冬の陽射しが明るかったが、竹はいささかツヤを失い、くすんでベージュ色に見えた。

垣根の竹は七〇八年の寿命。古くなるたびに定期的にとりかえてきたが、全長百八十メートルと長く、一回百万円かかる。

もうそろそろブロックで、と思わないでもないが、「発祥の地をブロック塀にするわけには

…」と悩み、苦勞の末、でも「自転車の後ろの席に座った小さい子が、口ずさみながら垣根の前を通り過ぎていく。そんな姿を見ると、自分が生きている限りは守っていかないと」と、記事の中で語っていた。



なんだか、ほかほかするほど嬉しくて小声で歌ってみる。

「かきねの かきねの まがりかど」

板塀でもない、生垣でもない、ブロックでもない「竹のかきねのまがりかど」。

ここだけにしかない、まがりかど！

我家の近所にも、こうした唱歌や童謡が生まれた場所はあるが、ま、いいとこ歌碑があるだけ。

渋谷の「春の小川」だって、どこも暗渠の下水道に変わり果て探すことさえ出来なかった。

林立する高層ビルにさえぎられて、富士山どころか空もろくに見えないのに「富士見坂」、という場所も散歩でよく通る。

日本は景観を大切にすることを意識や法律に乏しい



とよく云われるが、まわりを見渡しながら「全滅だ」と噴いていた。

だから、この歌がこの世に誕生してから今日まで七十五年も、この景観を維持し続けている現実を奇跡のようだと感じている。



「でも、その人お金持ちだからできるんじゃないの？」

この垣根の話をすると、何人もの人が「お金があるから」という風に話をまとめるのがどうも気に入らない。

私は「じゃあ、お金があつたらあなたもそうする？」と言葉をかえす。そして、かえしながら、自分自身、生き方に直結するお金の使い方について考えてみる。

そして、お金がある無しにかかわらず、自分のことだけでなく、この人が他人の笑顔を大切にしている生き方であることにしみじみ思い至る。

自転車に乗った見ず知らずの子どもが大人になったとき、その心の中に、歌えばこの景観が財産のように立ちのぼってくる、そんな見えな

い幸せをも察することのできる人なのだろう、と考えると、私もこんな風な価値観で暮らしたいと憧れた。



約一年ほど前のことだが、SNSについてロシア情報セキュリティ会社が調査した、日本人千人分のアンケートにはショックを受けた。

SNSで嫌な気分になった理由のトップは、「他人が自分よりも良い人生を送ったことを知ったとき」で、「結婚、子供、旅行、休暇などが自分より幸せそうだと不快になる」が、なんと五十四パーセントだというのだ。

なんでも比較し、自分が一番でいたい嫉妬心オンリーの人は確かにいる。しかし、五割を超えていることには「ホントに？」と信じ難い思いだ。が、そうはなりたくない。

もし精神的に追いつめられたり疲れたら、この歌を歌うことにしよう。

きつと幼い頃にかえったような素直な気持ちを取り戻し、酸素を吸い込んで、元気にスタート出来そうな気がするから。



いまいともこ/人材教育「とも子塾」主宰。立教大学文学部史学科卒業後TBS東京放送入社、アナウンサーを務める。1987年(株)「とも子塾」を設立、現在に至る。新著『社会人用語ハンドブック』(サンマーク出版)、『誰とでもラクに話せるコツ101』(高橋書店)、『あいさつ&スピーチ「言葉につまらずに話す技術」』(PHP研究所)のほか著書多数。<http://www.tomoko-juku.com>【近況】ハガキの隅にちよこっと描いたイラストを褒められ、少しいい気分になっています。学生時代絵の点数は、普通の3でした。でも好きなので、我流で楽しんでいます。